

■研究課題名

【スーパーセル苗による“はなやさい”の作期拡大技術の確立】

〔研究機関名〕 徳島県立農林水産総合技術支援センター 農業研究所

〔研究担当名〕 野菜・花き担当

〔成果の情報〕 ブロッコリーの初夏どり栽培に適した冬期の育苗方法を開発しました。この育苗方法は加温設備を使用せず、低温下で80日～100日かけて苗を生育させます。その結果、草丈が低く、がっちりした草姿で、葉色の濃い苗が育成できます。この苗は、定植後の活着および生育がよく、栽培期間の短縮に役立ちます。

■研究の背景・目的

徳島県ではブロッコリー初夏どり栽培が増加傾向にあります。この栽培は、育苗期が冬期にあたり、暖房や温床が必要とされています。また、日照も少なく、ハウス内温度を高く保つと徒長しやすくなります。更に、栽培期間が70日～80日と短く、高収量を得るには活着の良い苗が必要です。よって、苗の安定供給や経費節減を目的に、加温しない育苗方法の検討を行いました。

■成果の内容

- (1) 11月下旬～12月下旬に播種し、間口3mのミニパイプハウス（写真1、写真2）で約80日～100日間育苗します。ハウスのサイドは、日中開放して低温で管理します。低温管理苗は、加温ハウスで育苗した慣行苗に比べ草丈が低く、葉色の濃いガッチリした姿となります（表1、写真3）。
- (2) 低温育苗は慣行育苗に比べ定植後の活着が良く、生育も旺盛であり（図1）、その後の収穫時の地上部重や花らいの調製重が重くなります（図2）。このことは、栽培期間の短縮に有効です。
- (3) 育苗中は、定期的な追肥が必要です（データ省略）。また、日中でも苗が凍結するような栽培地では、ブラインド（成長点が無くなる生理障害）の恐れがあります（データ省略）。

■普及の見込み・波及効果

育苗期間が3倍程度の長期にわたることが問題です。加温設備の整っていない農家や活着の良い苗を切望している農家には利点が大きく、今後、普及を検討していく予定です。

■主なデータ図表・写真



写真1 育苗施設



写真2 育苗施設内の状況



写真3 加温ハウスで育苗した慣行苗（左端）と低温管理で育苗した苗（右4つ），但し大きさの違いは育苗時の施用液肥の濃度差による

表1 低温育苗と加温ハウスで育苗した慣行苗の苗質

	葉数(枚)	草丈(cm)	葉色(SPAD値)	生鮮重(g)	乾物重(g)	乾物率(%)
低温育苗	3.0±0.0	5.8±0.0	60.4±0.8	0.59±0.03	0.10±0.00	17.4±0.3
慣行育苗	3.2±0.2	9.3±0.2	40.7±1.6	0.67±0.04	0.10±0.01	15.3±0.4

注) 表示は平均値±標準誤差、N=5

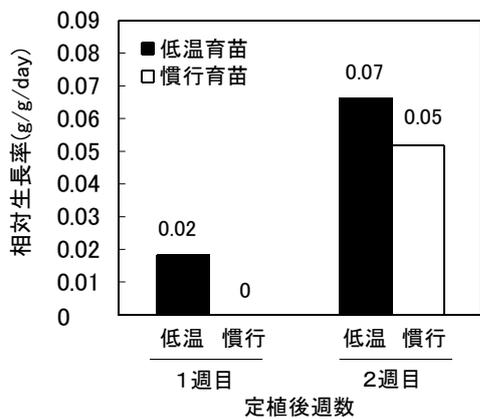


図1 低温育苗した苗と加温ハウスで育苗した慣行苗を圃場に定植した後の地上部相対成長率の推移 (n=10)

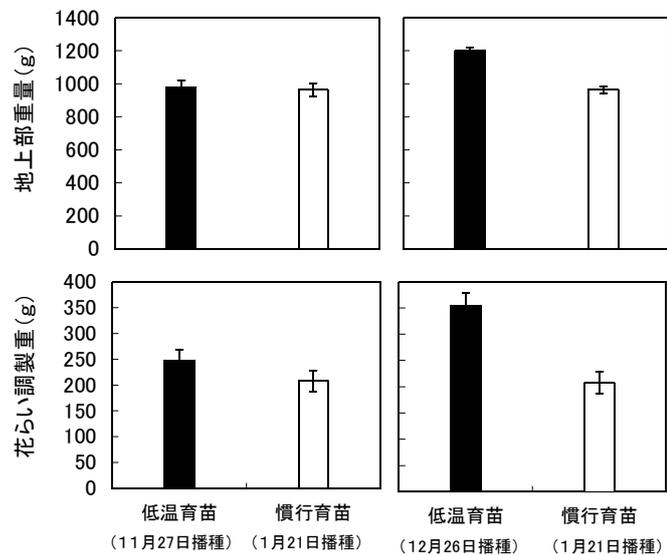


図2 低温育苗した苗（■）と加温ハウスで育苗した慣行苗（□）の収穫時の地上部重量および花らしい調製重の違い

注) 図中の誤差線は標準誤差 (n=10)